正解のない未来を、私たちはどう描くか。

建築学部

1年生のリアルな声から見えた、未来のエスキース

「建築を学ぶ」とは、なんでしょうか？ それは図面の描き方を覚えることではありません。そこに生きる人たちの暮らしを想像して、街の未来を描き、実現する力を身につけることです。
入学して間もない１年生たちは、日々の講義や対話を積み重ねながら、早くも自分自身の将来像「未来のエスキース」を描きはじめています。彼らのありのままの言葉から、東北工業大学で建築を学ぶことの意義を感じてみてください。

エスキースを描くことは、街の未来を想像すること

── 建築はひとりでは完結しない。対話によって隠れたニーズを把握し、形にするプロセスが未来のまちづくりに繋がる。

エスキースを描くことは、その建物が建つ街の未来を想像すること。“街をつくる”視点が、自分の目指すものを具体化するための大きなモチベーションになりました。

将来は未来のビジョンや新しいアイデアを形にできる人になりたい。地元だけでなく東北から全国にも目を向けながら、みんなが暮らしやすい街をつくることが目標です。

夢は設計士です。東北の街を活気づけるために、街の景観や構造、環境について深く学びたいと思っています。

震災の記憶を、安心できる未来へつなぐ

── 東北の地で建築を学ぶ意味。それは過去の痛みを強さに変え、次に備えるための生きた学問がここにあるから。

いつか必ずまた起こる震災への備えや対策を学び、将来につないでいきたい。震災を経験した地域だからこそ、次の世代へつないでいく学びがここにあると感じました。

私たちは震災を経験した世代です。災害に強いまちづくりのあり方を探究することで、被災経験の有無に関わらず、多くの人たちに安心して暮らせる未来を届けたい。

建築という分野が欠けたら、生活は成り立たない。極限の状況下でも復興のために行動した建築関係者の実話を聞き、責任の重さと社会的な意義を感じました。

「正解のない問い」に向き合い、人間力を鍛える

── 技術ばかり磨いてもいけない。自ら考えて行動する意識や他者との交流によって“生きた建築”が生まれる。

学んでいくうちに、改めて建築には正解がないことを実感しました。だからこそ、専門知識と同じく感性や社会に貢献する意識も大学で身につけていきたいです。

建築学は物理や数学に収まらない、たくさんの要素が集まっている学問だと気づきました。社会のさまざまなニーズを形にするためにも、建築の専門性だけに縛られず、広い視野で人間力も鍛えられる大学生活にしたいです。

大学生活を通して、自分の力で考え行動する習慣を身につけることで、精神的にも経済的にも自立した社会人を目指したいと思います。

学生の言葉にあるように、建築の学びにはあらかじめ用意された正解はありません。だからこそ、自ら考え、手を動かし、試行錯誤を繰り返して社会へ実現していく力が求められています。一人ひとりの「なぜ？」が「できた！」に変わる実践の場が大学です。
あなたも自分だけの Esquisse（エスキース）をここで描きはじめてみませんか？

建築学部

未来のエスキースを描く。
TOHOKU INSTITUTE OF TECHNOLOGY
東北工業大学

Students' Voices 2026